

南畝さん、がんばって

倭人、城を築く

『播磨国風土記』の安相里条に「長畝川」の由来が書かれている。賀茂郡長畝村の村人がこの川に菰を採集に来たところ、それを奪おうとした石作連に殺害され、川に死体を遺棄されたので長畝川となったというのである。これはこれで面白い話ではあるが、詳しくは姫路文学館に譲ることとして、この記事にでてくる「長畝」は、JR姫路駅のすぐ南にある「南畝町」が比定地の候補である。現在ではマンションや住宅が建ち並んでおり、どこにでもあるような景観となっている。

さて、「南畝」と書いて「のうねん」と読むこの地名と同じ姓を持つ武士がいたことを御存知でしょうか。本号では、少しばかりこの「のうねん」について見ておきたい。

南畝町あたりの空中写真（昭和二十二年米軍撮影）



姫路駅

山陽電車

飾磨街道

（このどこかに南畝氏の館跡が眠っているかも）

文禄・慶長の役では、日本軍の主力は、四国・中国・九州の諸大名の軍勢によって構成されていた。

さて、姫路と朝鮮侵略戦争の関係となると、例えばその後の姫路城主がこれに出兵していたかどうかという話にもなってくる。結論からいうと、近世の姫路城主では渡海した者はいない。但し、姫路城には「滴水瓦」という大陸形式の軒瓦が葺かれており、間接的な影響は認められる。池田輝政自らは名護屋に在陣し渡海はしていないが、弟の長吉は渡海しており、「滴水瓦」の採用はそのことに由来すると見ることも可能だ。

この戦争で「活躍」したのは主に九州の大名であった。豊前中津の黒田長政も当事者の一人だ。もうおわかりであろう、姫路とこの戦争を結び付けるのは黒田であることが。黒田氏はその後、筑前福岡に移るが、同家の分限帳には「南畝」氏が登場するのである。黒田家の家臣には良く知られるところで母里や後藤、梶原、淡川といった播磨以来の者がいる。南畝氏もその一人なのである。江戸時代前期南畝氏は百五十石程度の禄となるが、『黒田家譜』には長政のお側で活躍する武勇の士として描かれており、姫路以来「盟友」的な存在として黒田とともに戦ってきたのかもしれない。

中野等氏の研究（『豊臣政権の対外侵略と太閤検地』校倉書房）によるとこの「南畝」は、播磨出身で朝鮮出兵では船に関わる仕事をしていらしい。「南畝」には水軍の伝統はないだろうから、おそらく輸送船や水夫の調達に奔走したのだろう。この他にも、播州産の武士が多数従軍したと想像される。

文禄の役では、黒田軍は3番隊として金海に上陸、金海・昌原（本ニュースNo.17参照）の2城を落し、咸鏡道・平安道へと半島の奥深くへ侵入した。播州弁の雄叫び、断末魔の声が、緑少ない朝鮮の山々に響いたに違いない。



黒田軍が守備した機張城跡の石垣（右）と城跡から見た城下（左）。湊としては最適な地形で、ここに築城した理由が体感できる。城下と城跡の間には多くの削平地があって、こういうところに将兵が小屋掛けして住んでいたのかと思わせる。現在釜山広域市に属する。左写真の集落は竹城里（チクソンニ）で、刺し身を食べさせる店が点在し、それが名物になっているらしい。韓国人の生活水準が高くなったことがわかる。釜山市街からここへは、国鉄東海線、または海雲台（ヘウンデ）あたりから市外バスで「機張」行きを見つけて、機張で下車。そこから市内バスで「竹城里」行きに乗換となる。機張駅周辺には市場もあって、食料の調達には問題ないでしょう。



"Shiro Fumi" No.18 The News of Himeji Center for Research into Castles and Fortifications.